令和４年度　瑞浪市第１層協議体　高齢者生活支援検討会議　会議録

令和４年１２月１３日
記録者：高齢福祉課 松本

■　会議の日時：令和４年１１月２４日（木）　１３時３０分から１５時３０分まで
■　場所：瑞浪市役所　西分庁舎１階　会議室
■　出席者：熊澤清和　成瀬和子　加藤佐紀　南波行信　藤田敏明　比留間孝
永冶昌代　三輪晃治郎　岩島夕夏　片桐千絵　安藤弘美
加藤聖二　正木英二
事務局：梅村やよい　長谷川幸　松本由佳
■　議事：
１．開会
２．民生部長挨拶
３．委員の紹介
４．委員長及び副委員長の選出
委員長　熊澤清和
副委員長　岩島夕夏
５．委員長あいさつ
６．議題
１）生活支援体制整備事業について
事業の概要、協議体及び生活支援コーディネーターについて
勉強会、懇談会の実施について
２）生活支援コーディネーターの活動報告
３）地域の状況・課題を共有し、取り組みやすい課題・活動を考える
テーマ「高齢者の日常生活の課題に対して、地域住民による取り組みはどのようなものが考えられるか」（意見交換）
【各委員より】
・　新型コロナウイルス感染拡大の前は地域のボランティアに声を掛け合い助けてもらうことが多かった。しかし、現在は、地域のボランティアとのつながりや地域とのつながりが希薄化している。
・　家族の立場として、地域の方などに支えてもらうことも必要であるが、自分の親はできるだけ最後まできちんと看ていく意識も大切であると感じる。家族の力でできない部分を、民生委員などの地域の方や介護保険サービスの力を借りて補っていけるよう意識することも必要であると感じる。
・　社会福祉法人として地域に貢献できるように、常々考えているがなかなか難しい現状にある。この会議により、地域の実情、課題を把握し、これから少しずつでも地域に貢献できるような施設にしていきたい。
・　ボランティア連絡協議会において、いろんなお手伝いができるボランティア団体があるため、まずは社会福祉協議会へ相談をしていただきたい。
・　地域において、役員の成り手がないこと、組織率が下がっている現状がある。集合住宅にも後期高齢者が多く住んでいるが、自治会への参加率が低いため、高齢者の実態がつかめない。
・　シルバー人材センターの会員数が年々減少していることが課題である。平成 29 年は

320 人、令和 4 年 11 月 1 日現在では 260 人の会員数となる。高齢者等の雇用の安定に関する法律改定により 70 歳まで継続雇用が企業の努力義務となり、高齢者の雇用の変化も背景にある。さまざまな手段で広報をしているが、なかなか新規会員数が増えず厳しい状況にある。

- 民生委員の成り手が非常に少ない現状がある。昔は隣近所、世話役など地域の人同士が世話を焼いていた状況があったと思う。現在は、隣近所の関わりが希薄化していると感じる。
- 地域住民一人一人が、近所の様子で新聞が溜まっている、電気がついていないなど、「気付く、見守ること」、それを次のアクションにつなげることがとても重要である。地域に住んでいる方の意識を変えて、夜散歩をする際に、すれ違った方へ挨拶をすることや、隣近所の家に電気がついているかを確認することで見守りを行うこともできると思う。
- 小さなことの積み重ねを大切にし、できないことに目を向けるのではなく、できることは何か考えることが必要であると感じる。地域住民一人ひとりが、自分ができることは何かという視点に立って、意識を変えることで散歩の際の見守りなど、高齢者支援の輪が少しずつでも広がっていけばと思う。
- 訪問介護でできる内容は限られているため、制度外のサービスのニーズも多い。訪問介護の実費サービスも行っているが、それでも対応できない、例えば、大掃除、草刈りをしてほしいと言った相談が近年増えてきている。そのため、今年度より、相談ごとに対応するサービスを５分 500 円で料金設定をし、電球交換、郵便投函などを実施したところ、需要がかなりあった。
- 介護の現状として、老々介護や、男性の親を男性の子供が面倒を見ているが、同性同士のため日常生活が難しいケースもある。また、介護保険サービスを 60 代で利用しているケースもあるため、女性のヘルパーでは対応できないことがある。今年度より男性のヘルパーの導入をしたところ、男性にしかできない支援を求められることが増えてきた。介護保険でできないこと、女性ではできないことも増えてきており、今後、さまざまなニーズの違いにできるだけ合わせたサービスの提供について事業所内でも検討を行っていきたい。
- 移動販売は７年目となる。日吉地区などについては、利用されていた方が亡くなる等で利用が減少している状況にある。新しい顧客を見つけるのも大変な状況にある。スタートを切ったときは、山間部の方が買い物ができず困っているということで利用を開始した経緯がある。現在は、市内でも便利だからと利用があり、そういったところでもニーズがあると感じている。民間であるため、100％要望を受けられないが、努力していきたい。
- 高齢者の支え手の不足の現状について、2050 年問題を聞き、１人が１人を支えないといけない恐ろしい時代になっていくと感じた。全国的な問題であるが、今自分ができることから少しずつでも取り組んでいかないと変わっていかないと感じた。SDGS の 11 番目の目標について「いつまでも住み続けられる町」といった目標があるのでその目標に向かって、移動販売の事業を通して少しずつでも取り組みにつなげていきたい。
- 当たり前のことが当たり前にできない時代になってしまったと感じる。おせっかいで声をかけても、ほっておいてほしいと言われる方も多い。なぜこのような時代になってしまったのか疑問に感じる。おせっかいをしてくださる方を地域の中で探していかないといけない時代であると強く感じる。
- ちょっとした声掛け、見守りを上手く地域の中で浸透していくような働きかけができるようになればと思う。できない事をボランティアに手伝っていただくことも大切である。しかし、例えば、陶地区で困っている人の所へ日吉地区、瑞浪地区、釜戸地区

からボランティアが駆けつけるというのもだんだんと不思議に感じるようになった。住んでいるところの隣近所の中で力を貸してくれる方にご協力をいただき、自分もゴミを出すので、ついでに協力しますというような仕組みづくりができないか日々思うこともある。市内どこでも駆けつけてくれるボランティアもとても大切であるが、顔見知りの関係の中で助け合いの支援ができないかと思うこともある。知らないだけで、実はやっている方もいるかもしれないが、少しずつできることをみんなでできるようになればと思っている。そういう瑞浪を作っていけたらと思う。

- 地域包括支援センターの相談の中で、高齢の親が倒れて介護が必要となったときに、家族から施設にすぐに入れたいと相談があるケースがある。そういう状況が起こった時は、家族も親のことを考える貴重な機会であると感じる。相談を受ける中で、家族も忙しい状況にあると思うが、丁寧な説明を行い家族としてできることに気づいていただけるようなアプロ―チをすることを大切にしている。
- サービスの担い手が減ってくる中で、ボランティアを行う担い手も少ない。元気な高齢者は仕事をしていて、高齢者は一体地域の中でどこにいるのかと思うことが多い。介護予防教室においても、どこに情報提供をすると高齢者に集まってもらいやすくなるかとても悩むことが多い。地域で生活している中で、自分が今こんなことをやっているというような情報を発信していくことも大切であると感じた。
- 簡単に誰でもできること、気付いたことを伝えるなど、地域の皆さんでできることから始めていただけたらと思う。生活支援体制整備事業についても、住民の皆さんが始められることから始めていこうといった事業である。
- 包括支援センターで訪問をして相談対応をする際に、「買い物に行けない」という困りごとの相談が多く聞かれるようになった。自分で見て買い物をしたいという要望が女性の方に多い。今後も移動販売事業者の方にご協力をいただきたい。
- 高齢化が進み、若者が名古屋方面に仕事に行き、地域に若者が少ない。自治会の役員をする担い手も不足している。地域の現状として、誰かに押し付けて何かをやってもらうというのは無理があると感じる。
- できることをできる範囲で行うことを大切にし取り組んでいる。完璧に行おうとすると負担となり、無理がきてしまうため、そういったモチベーションも大切にして頑張ってきたいと思う。
- 担い手不足の問題もあるが、大変なことを行うのではなく、散歩の際の見守りなどちょっとした支援について、複層的に行うことが大切である。
- 特定のその人がやらないといけないという状況ではなく、地域住民、民生委員、福祉委員、区長、郵便局、新聞店など皆で取り組んでいくことが必要である。そういう体制を作っていけたらと思う。
- 高齢者の困りごとの中に、医者にかかるにも移動手段がないというような話をよく聞く。高齢者の免許返納の件なども世間では言われているが、この地域では 80 歳になっても車に乗れなくなることで医療機関を受診できない現状もある。コミュニティーバスの利用も病院の予約の時間に間に合わない、帰りのバスの時間がないと言った話を聞く。高齢者の支援は課題が多いと感じる。長寿クラブでも、できるだけ若者に頼りにならなくて良いように、元気で健康に努めていくことが大切であるということを伝えている。

７．閉会